



営農NEWS



水稻の斑点米カメムシ対策として

水田周辺は出穂 2 週間前までに除草を行いましょう

茨城県における斑点米カメムシ類の主体はクモヘリカメムシで、水稻の出穂期が近づくと本田周辺に飛来します。この他に、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどが加害しますが、さらに近頃は、加害能力の高いイネカメムシが増加傾向にあります。また、従来は畦畔にのみ生息していた小型カスミカメムシ類のアカスジカスミカメなどが、本田でも確認されており、これらの斑点米発生に関与について調査研究が進められています。

県病害虫防除所「病害虫発生予報 7 月号」によりますと、6 月下旬現在、有効積算温度から予測したクモヘリカメムシ産卵開始時期は平年よりやや早く、水田付近のイネ科雑草における斑点米カメムシ類のすくい取り虫数は平年よりやや多く、発生地点率がやや高いことから、**斑点米カメムシ類の発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想しています。**

これから、畦畔等で生息しているカメムシ類が、出穂期とともに水田に移動します。更に、本田で産卵し、ふ化した幼虫が成長して、再び吸汁加害を繰り返します。水稻の出穂初期による吸汁では、**不稔粒となり、激しいと青立ちして著しい減収となります。**また、**乳熟期以降に吸汁を受けた粒が斑点米となり、等級落ちの原因となります。**

このため、水稻の出穂をむかえるにあたり、**出穂の 2 週間前までには畦畔や水田周辺の除草を必ず行ってください。**なお、**出穂直前の除草は、そこにいるカメムシ類を本田へ追い込んでしまう恐れがあり、避けてください。**

<薬剤防除のポイント>

1. **本田に飛来したカメムシ類（成虫）を対象とする場合、防除時期は穂揃期です。**
2. 斑点米の発生を抑制する**重要な防除時期**は、飛来虫が産卵、ふ化して発生した**幼虫を対象に、出穂 10～15 日後頃**です。なお、その後もカメムシ類の発生を観察しながら、多発生の場合は追加防除を行い、斑点米発生を減少させましょう。
3. 出穂が周辺よりも早い水田、ヒエ等の雑草が多発生している水田では、成虫の飛来が集中しやすい傾向があります。また、出穂の遅い水田では、周辺で増殖した新成虫が侵入してくることがあります。これらの水田では十分な注意が必要です。

表 1 水稻 カメムシ類の主な防除薬剤（平成 28 年 7 月 5 日現在）

| 薬剤名 | 希釈倍数または使用量 | 使用時期 / 使用回数 |
|---------------|---------------|-----------------------------|
| MR. ジョーカーEW | 2,000 倍 | 収穫 14 日前まで / 2 回以内 |
| MR. ジョーカー粉剤DL | 3~4 kg/10a | 収穫 7 日前まで / 2 回以内 |
| スタークル顆粒水溶剤 | 2,000 倍 | 収穫 7 日前まで / 3 回以内 |
| スタークル粉剤DL | 3 kg/10a | 収穫 7 日前まで / 3 回以内 |
| キラップフロアブル | 1,000~2,000 倍 | 収穫 14 日前まで / 2 回以内 |
| キラップ粉剤DL | 3~4 kg/10a | 収穫 14 日前まで / 2 回以内 |
| スミチオン乳剤 | 1,000 倍 | 収穫 21 日前まで / 2 回以内 |
| スミチオン粉剤3DL | 3~4 kg/10a | 収穫 21 日前まで / 2 回(出穂前は 1) 以内 |

水稻の黒点米（くさび米）の発生原因と抑制対策

（「農業いばらき」2016 年 7 月発行 第 68 巻第 7 号：P26～27 より）

県内の品種「あきたこまち」を中心に、平成 22 年、24 年に多発生した黒点米（くさび米）の発生原因と対策技術について、茨城県農業総合センター農業研究所で研究を行った結果、その成果が上記の雑誌に掲載されています。

黒点米の発生原因は、基本的に「登熟期の水ストレス」で、生長中の米粒に水ストレスがかかると、その表皮に傷口（裂皮）が生じ、米粒が肥大する過程で、表皮にかかる力が高まると、微小な傷口は引き裂かれて拡大します。一方、米粒には、このような傷口に対する防御機構があり、傷口が大きく、深くなると、米粒表層の糊粉層と呼ばれる組織（人間でいえば皮膚のようなもの）の反応によって、ポリフェノールのような抗菌性物質を蓄積して黒くなります。近年、高温傾向が続いており、高温下では湿度が高い場合でも、穂からの蒸散量が増えるため、特に登熟期の水ストレス（水不足）に注意する必要があります。

<発生を抑制する対策>

黒点米の発生を抑制する対策として、①深耕（耕起深 15 cm の確保）による根域の拡大、②穂肥の施用による老化や退化の抑制、③稲が最も水を必要とする開花後 20 日間の水管理法の改善（田面水を極力切らない水管理）が重要とされています。

稲は麦などと違って、水を吸い上げる力が極端に弱いため、水不足には敏感で、特に登熟期には、稲の一生で最も水を必要とする時期ですので、できるだけ水を張っておくことがすすめられています。

農業使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040